

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

105

長岡京の厄除け札
「蘇民将来」札木簡

今年も夏の風物詩、京都三大祭りのひとつである祇園祭が行われました。みなさんの中にも山鉦巡行など、祇園祭に出かけた人がいると思います。そこで、各曳山で授与される「ちまき」につけられた「蘇民将来」の紙札に気付かれたでしょうか。今回紹介するのは『蘇民将来之子孫者』と書かれた1200年前の木札で、今年の3月まで行われていた長岡京跡右京の発掘調査地（長岡京市開田四丁目）で出土しました。

「蘇民将来」信仰は疫病除け信仰で、奈良時代に書かれたとされる『備後国風土記逸文』の説話にちなんでいます。その説話とは、武塔神（スサノヲノミコト）が旅をした時に蘇民将来という人から受けたもてなしを喜び、『蘇民将来之子孫』と明示すれば疫病を免れられると約したというものです。この信仰が現代にも受け継がれ、冒頭の祇園祭だけでなく、地元長岡天満宮でも毎年8月24日・25日に「蘇民将来」の札を付けたお守りが授与されているのです。



▲現代のちまきと「蘇民将来」札

今回出土した「蘇民将来」札木簡は六条条間南小路北側溝から出土しました。長さ2.7 cm、幅1.3 cmと非常に小さく、表裏面には4文字ずつ2行に分けて『蘇民将来之子孫者』と墨書きされています。木簡の上部には小さな穴が設けられ、中心付近には木釘が打たれていました。穴は大きさやお守りとしての用途を考えれば、着衣に付けてぶら下げるための糸穴と考えられます。また、木釘は身につける目的を果たしたあと、「蘇民将来」札木簡が土壁などに打ち付けられたことを示しています。

この「蘇民将来」札木簡は全国で約50点ある類例のなかで最も古く、「蘇民将来」信仰が長岡京時代には始まっていたことを示しています。また、木札でありながら非常に小さく、糸穴があることから、持ち主がまさしく「疫病除けのお札」として身に付けていたことが分かります。このように「蘇民将来」札木簡は古代と現代を繋ぐ非常に興味深い資料なのです。



▲出土した「蘇民将来」札木簡